

わが家の歴史を調べる（賀来、加来氏を例にして）会

NHKのファミリーヒストリーのような番組のせいもあって、家の歴史を調べることはやってきました。

長年、わが家の歴史を調べてきた経験から、その困難さや、歴史のいい加減さに気が付いた私ー加来利一が私の家の歴史を例にして、資料の調査、まとめ方などを発信して、皆様と考えていきたいと、このグループを開設しました。全国の賀来さん、加来さんだけでなく多くの方のご参加を望みます。

① 我が家は、明治生まれの父が歴史の教諭であったこともあって、分家でありながら、豊前の福岡県築上郡に古い墓地を持ち、戦国末期の五輪塔があり、さらに、戦国末期に豊後から豊前に移り住んでいたことや、先祖の系譜を菩提寺の金剛院の過去帳で調べていてくれたことや、豊後大神氏につながることは知っていたので、ここから、調査を開始した。

奈古加来家歴代之墓竣工式



② 豊後大神氏（ぶんどおおがし）には、中世の武将として有名な緒方惟義がいる。緒方 惟栄（おがた これよし、生没年不詳）は、平安時代末期、鎌倉時代初期の武将。豊後国大野郡緒方荘（現在の大分県豊後大野市緒方地区）を領した。通称は三郎。諱は惟義、惟能とも。祖母岳大明神の神裔という大三輪伝説がある大神惟基の子孫で、白杵惟隆の弟。

『平家物語』に登場し、その出生は地元豪族の姫と蛇神の子であるなどの伝説に彩られている。

宇佐神宮の荘園であった緒方庄（おがたのしょう）の荘官であり、平家の平重盛と主従関係を結んだ。治承4年（1180年）の源頼朝挙兵後、養和元年（1181年）、白杵氏・長野氏（ちょうのし）らと共に平家に反旗を翻し、豊後国の目代を追放した。この時、平家に叛いた九州武士の松浦党や菊池氏・阿蘇氏など広範囲に兵力を動員しているが、惟栄はその中心的勢

力であった。寿永2年（1183年）に平氏が都落ちした後、筑前国の原田種直・山鹿秀遠の軍事力によって勢力を回復すると、惟栄は豊後国の国司であった藤原頼輔・頼経父子から平家追討の院宣と国宣を受け、清原氏・日田氏などの力を借りて平氏を大宰府から追い落とした。同年、荘園領主である宇佐神宮大宮司家の宇佐氏が平家方についていたためこれと対立、宇佐神宮の焼き討ちなどを行ったため、上野国沼田へ遠流の決定がされるが、平家討伐の功によって赦免され、源範頼の平家追討軍に船を提供し、葦屋浦の戦いで平家軍を打ち破った。こうした緒方一族の寝返りによって源氏方の九州統治が進んだとされる。

また惟栄は、源義経が源頼朝に背反した際には義経に荷担し、都を落ちた義経と共に船で九州へ渡ろうとするが、嵐のために一行は離散、惟栄は捕らえられて上野国沼田へ流罪となる。このとき義経をかくまうために築城したのが岡城とされる。その後、惟栄は許されて豊後に戻り佐伯荘に住んだとも、途中病死したとも伝えられる。（以上ウィキペディア）（写真は緒方町教育委員会）



③ 緒方惟義の祖先を知りたいところだが、ここでは、緒方惟義と賀来氏—加来氏との関係に着目してみよう。この関係についての系図上のものは、大神系の各氏に多数残されているが、年代の関係等からみて最も合理的だと考えられるものは、中世の賀来氏を、系図と文書を中心に研究された論文、「賀来考」（孔版、国会図書館所蔵）の千葉県在住の賀来秀三氏の推論であろう。この論文は、賀来の地名の起こりから、多数の文書を検証したものであって、

長文にわたるので、内容の詳細については、

<http://kaku-net.jp/>

内の「賀来のルーツ」-「賀来考」に PDF ファイルとして公開しているので見ていただきたい。

それに従うと、

永暦元年(1160)に、藤原頼輔が豊後守となった時の御任始めに、由原八幡宮に祈願した時、「賀来社」(よろこびきたるのやしろ)と贅えてより、由原社を国衙では賀来社(かく社)と称するように成った。由原宮領地の大部分を占める黒田里周辺の地域(この頃の賀来川は山手側を流れており、條里制の田園は広大であったと考えられる)を、莊園化して賀来庄と称し、領家(恐らく平重盛家)より、当時豊後で有力な豪族であり、家人であった緒方惟栄を通じて、賀来荘下司職或は地頭の補任を打診したものと推定される。

ところで治承三年(1179)に、緒方惟栄の従兄弟である佐伯三郎惟康が、領家(一条家)より下司職を拝領(柞原八幡宮文書 47、前出)しているが、それ以前に、惟栄の弟、賀来惟興が、豊前中島城主と成って、豊前に転出している文書があることから、最初の賀来庄下司職は惟興であったと推定される。

惟興は初めて賀来氏を称したが、治承三年に平重盛が没するや、惟栄の指揮に従って、豊前中島城主となって転出した。惟興は豊前賀来氏の祖で、元暦の頃には大畑城に移り、緒方氏が上毛郡に地名緒方を残したのと同様に、賀来氏もここに地名賀来を残した。(豊前の賀来氏は、その後、わが家を含めて加来氏と名乗る家が多い、豊前中津の地名も加来である。)とした。

これが、大神姓各氏の系譜と豊後賀来氏及び豊前加来氏の系譜とそれに豊後国衙文書、柞原八幡宮文書をあわせて推論した賀来秀三氏の論である。確定とはいかないが相当確率の高い結論であろう。

④ ウイクペディアの賀来氏には、次のように記載されている。

概要

大友氏が豊後に入国する以前から、豊後国で柞原八幡宮とゆかりが深い存在であった。源平時代には豊前国にも一族が展開し、以降は大友氏が豊後国に入国するとともに、宗家は豊後国で大友氏に仕え、豊前国の賀来氏(後に加来氏と改名した一族もある)は、宇都宮氏、大友氏、大内氏、毛利氏らの抗争の中で戦国期まで、勢力を保った。

賀来氏から出ている著名な人物に、幕末に本草学の神様と言われた賀来飛霞や初期の反射炉を利用して鉄製大砲を製造した実業家の賀来惟熊などがある。また、俳優の賀来千香子や賀来賢人も、豊前佐田の賀来氏の流れである。また、つるの剛士も母方が賀来氏である。

出自

現在、賀来の地名を持つ場所(大分市賀来)の付近は、長寛年間(1163年 - 1165年)以前

は、阿南郷黒田里であった。永暦元年（1160年）に豊後守に任ぜられた藤原頼輔は、子の藤原頼経を目代として豊後に派遣した。

赴任後まもなく、頼経は柞原八幡宮に参詣し、「よきこと来たるの社」（賀来社）という名称を奉納した。そして、柞原八幡宮に年貢を収めていた地域を賀来荘と名付けた。長寛2年（1164年）頃から、豊後の国衙が発する文書に「賀来」なる地名が使用されるようになり、地名「賀来」が発祥した。治承3年（1179年）、豊後大神氏の佐伯惟家が、賀来荘の下司になり、治承4年（1180年）に賀来氏を名乗った。これが、賀来氏の由来である。

⑤ 大正から昭和にかけて、賀来氏を中心として、豊後大神氏の系譜を研究し、印刷された方がいる。佐田の賀来氏の流れをくむ賀来惟達氏である。「大神姓系譜」と名付けられた孔版のもので、原本は、豊後宗家の菩提寺であった円成寺に寄付されている。子孫の方のご厚意で、写本を頂いたので、千葉市在住の賀来道生氏のご協力を頂き、PDF版にして国会図書館に納本した。この会のタイトル写真は円成寺が保有する原本である。

円成寺には、賀来惟達氏が建立した墓碑があるほか、賀来宗家ゆかりの中世の石造物もある。写真は、墓碑を建立した当時の、惟達氏を含む貴重なものである。



賀来氏歴代の墓と惟光の菩提塔、中央が賀来惟達氏とおもわれる（昭和8年撮影 円成寺提供）

⑥ 豊前の賀来、加来氏と豊後の賀来氏との関係は、前にも紹介しているが、豊後の賀来氏は、現在の大分市賀来の付近の荘園の下司や地頭、戦国期には柞原八幡宮の大

宮司を務めた賀来宗家が中心となるが、豊前の賀来氏は、中世では、佐田付近の賀来氏や我が家のように、後に述べる大友家内の内紛である賀来の騒動（享禄3年1530）の後、豊前に移った一族と、源平期に、平家の西国入りを阻止するため、緒方惟義が元暦元（1184）年に築城した豊前の大畑城・宇留津城等に配置された賀来惟興、惟定等があり、中世の戦記物、太宰管内志、豊前志等によく出て来る。この賀来氏は、ある時期から加来氏と名を変えたようであり、有名な豊前の宇都宮氏に家老として仕えた人は加来であった。

また、この大畑城・宇留津城等の賀来氏は、天正末期の戦乱で信頼の出来る出自伝承を失った。ただ、豊後の賀来氏との間で姻戚関係がかなりあったようである。

写真は、大畑城跡と推定される神社である。

また、

市道加来黒水練新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 加来居屋敷遺跡

中津市文化財調査報告 第50集 2010 中津市教育委員会

も公表されている。



⑦ 豊後賀来氏に起きた最大の事件は「賀来の騒動」と言われる事件である。

この事件は、江戸時代の戦記物語に数多く登場するが、内容は大筋同じである。

ただ物語りだけに、細部の描写もあり、事実かどうか判別が難しい部分も多い。

いずれ、系譜を調べるうえでどのようなところでこまったかも、発表したい。

ウィクペディアの「賀来の騒動」には、次のように記載されている。

概要

この時代、豊後大神姓の賀来本家の当主は賀来右衛門大夫であった。大友氏に仕え、その名
の一字をもらっている。大友の家臣に三派があった。大友氏の一族を御紋衆と称し、大友氏
とともに鎌倉より来た者の子孫を下り衆と唱え、その前より土着していた諸士を国衆と呼
んでいた。

国衆と下り衆とは、氏姓の上下を巡ってたびたび合戦に及んでいた。享禄3年（1530年）
春に不慮の出来事が発生した。下り衆の清田越後守鑑祐が国衆の本庄但馬守、中村左衛門佐
などの国衆を攻め、本庄、中村は自刃し、清田七郎左衛門越後守弟も戦没した。その後、越
後守と清田遠江守は、兵一千五百余を率いて賀来右衛門大夫を攻めた。賀来もほとんど危う
かったが、国衆の橋爪左衛門大夫鑑種、大津留常陸介鑑康が賀来のため来援し、賀来は清田
勢を撃破した。しかし、賀来も傷を受けて死亡し、大津留は豊前に逃れた。大友義鑑はこの
騒動を聞いたが、橋爪はお咎めがなく、大津留も後年、謝罪して本領を安堵された。これが
「賀来の騒動」である。氏姓の争いともいわれている。

写真は、大分市賀来の賀来氏屋敷跡の神社と賀来惟達氏が昭和8年（1933）に建てた記念
碑である。



⑧ さて、私が、賀来の騒動をまとめようとしたところハタと困った。戦死した賀来の当主
と思われる人の名前である。

現存する戦記物語等の文献には次のように記されている。

◎ 豊後全史 享禄三年 氏姓の乱

賀来城主賀来左衛門大夫

◎ 速見郡史 享禄三年春 氏姓遺恨之乱

賀来城主賀来左衛門大夫

◎ 豊筑乱記 享禄三年春 氏姓遺恨之事

賀来右衛門大夫

◎ 雉城雑誌、九州記 享禄三年春 氏姓遺恨之乱

賀来邑なる賀来左衛門大夫

◎ 両豊記卷十 享禄三年春 姓氏遺恨之事

賀来と云所に、賀来左衛門太輔と言う大身の國衆

◎ 外山幹夫著 大友宗麟 吉川弘文館発行 『両豊記、豊筑乱記』には、それぞれ一姓氏遺恨之事—などの項を設け、大要次のような 事件のあったことを記している。大分郡賀来の住人で犬神氏一族賀来左衛門大夫という大身の國衆

どうやら、賀来左衛門太夫らしい、

しかし、沢山あるからそれが正解とは限らない。孫引きということがあるからである。

最近の文献では、惟達氏の大神姓系譜は、賀来鑑保、右衛門太夫としている。

大友義鑑に仕え、その名の一字を授けられたとある。

賀来秀三氏の史料にも、見出しに 賀来左衛門太夫（鑑保）の記述が1行あるが、根拠の文書名の記載はない。

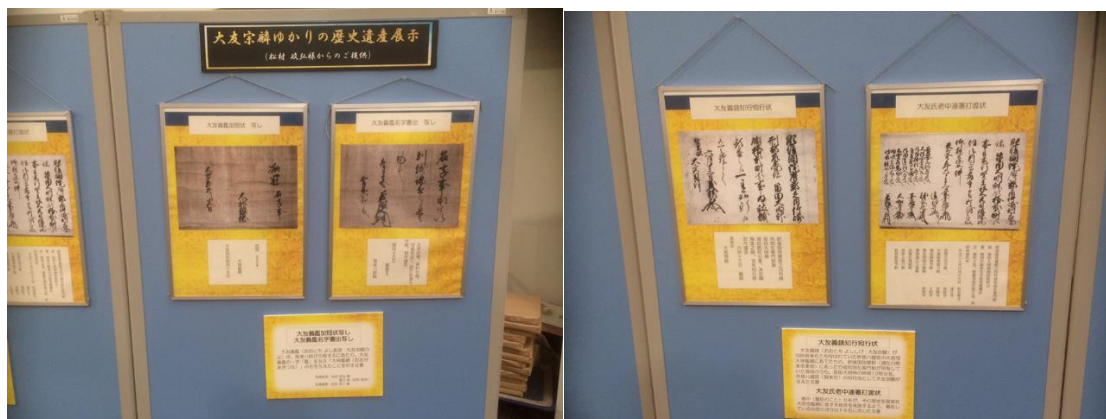
古文書は見つかっていないが、平成4年（1992）に出版した賀来（加来）ものがたりでは、鑑保の名を使用することとした。読みは不明である。

ところが、この後、思いがけないことが起こった。

◎ 平成二十六年（2014）春、山口県下関市在住の高齢の女性から、電話連絡があり、我が家に古文書が多数伝わっているの、見ていただけないかと のことであった、そこで、一部のコピーを送っていただいたところ、行方不明とされていた豊後賀来氏本家が所有されているべきものである様に考えられた。大分県や大分市の博物館に見せて、真偽を確認してもらってくださいと、連絡したところ、鑑定の結果大部分が真物であることが分かった。

系図などを除いて、主要な文書について、大分県の博物館が、展示会を開いた。

写真が展示された文書である。



次の写真は本家が行った供養



その後は、山口賀来氏が、さらに詳しく調査されているが、豊後賀来氏宗家が伝えていたものであろう。

⑩ 文書とともに、賀来宗家の系譜も系図として、残されていた。天明年間頃に記録されていたものようである。

この系譜の文明年間から慶長年間（1469-1614）のあらましを記すと、

政綱

賀来将監 死去年月母妻等不知 上字賜従 大友家

治綱

五郎左衛門 上字賜従 大友家 治綱父之為名代由原八幡宮大宮司職ヲ御預在刑部少輔鎮綱
迄代々相続ス大 宮司職御預之御判物有之

惟重（治綱弟）

紀伊守 豊前国居住 後肥後国居住ス

鑑綱

宮千代丸八郎掃部頭 上字並掃部頭賜従 大友家後判物有之

鎮綱

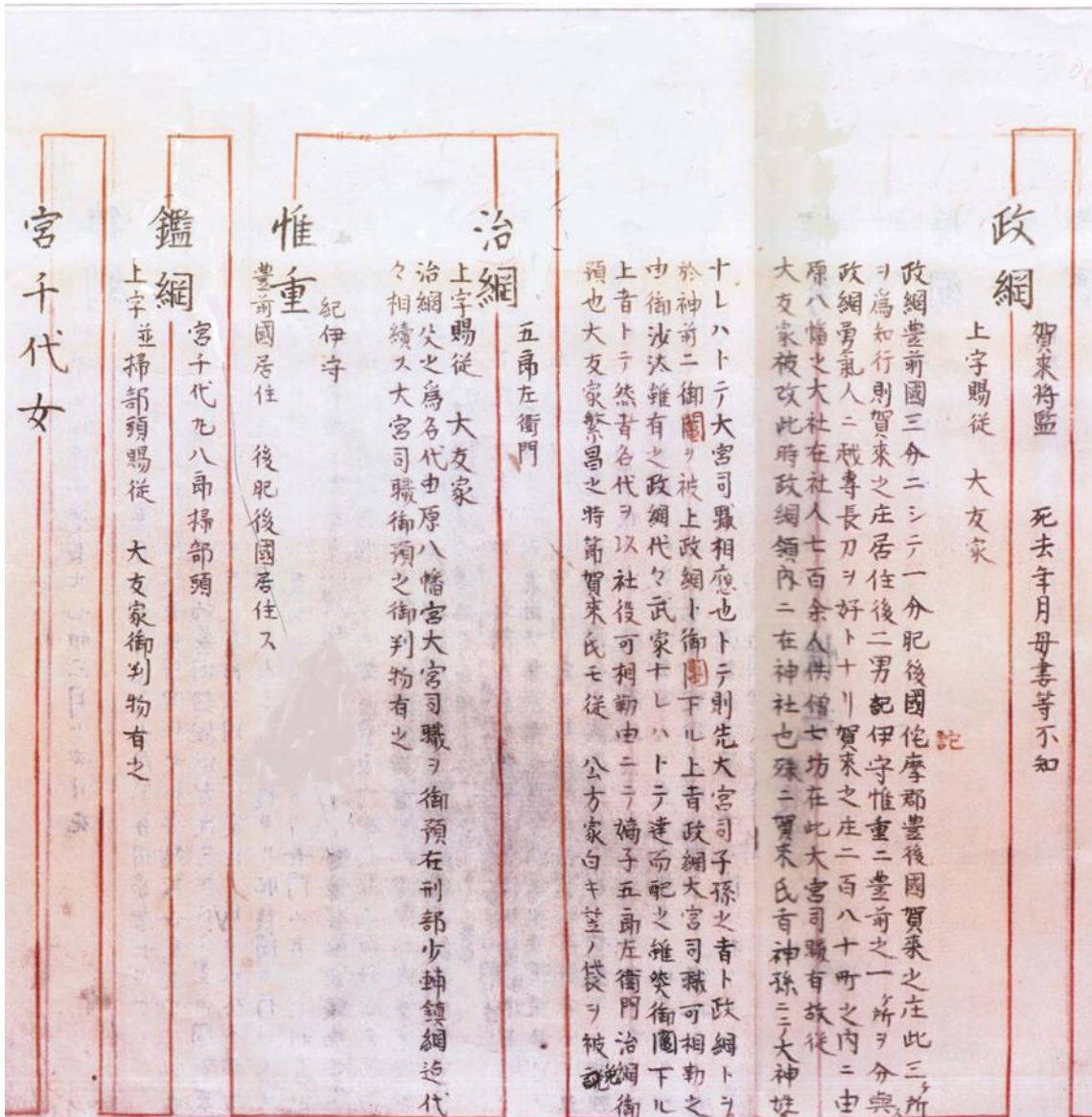
刑部少輔道仙慶長二十乙卯三月十四日死 母宮千代女 妻大友義統公御養女実者田北大和守
鑑鎮女、同鎮綱迄者従先祖代々豊後国賀来之荘ニ居住ス

とある。

さて、賀来鑑保であるが、賀来の騒動の時、豊後賀来氏の当主であるとされているが、山口の賀来氏の系譜での賀来五郎左衛門治綱が、此の時代に、柚原八幡宮（賀来社）の大宮司

であり、賀来の地頭であったので、治綱こそが鑑保であろう。治綱の一代前の賀来氏の当主であったとされる政綱が大友政親から、名の一字をもらっているの、治綱も大友親治から治の字を貰ったものと考えられる。さらに、大友義鑑から一字を貰い鑑保と名乗ったかどうかは不明であるが、大神姓系譜はそう記している。

写真は山口賀来氏系図の一部のコピーである。



⑪ 賀来鎮綱が山口（長門）に移り住んだ由来は、山口賀来家の系譜の添え書きによると、大友家が没落した後、豊後から肥後に行っていたが、大友家の縁者が長門にいたので、長門に移った。その後長門では、武芸を指南していたが、大友義統との約束もあり、毛利に仕えることはなかった。伝来の文書は、島津氏が豊後に在陣した時に焼き捨てたが、大友家の判があるものは帯の中に隠し、後代に伝えた。とある、しかし、この長門在住については、柚原八幡宮の宮師豪栄（賀来鎮綱の第二子八房）の元和

六年頃（1620）の文書 「賀来社宮師跡由来書」に、
御大友家は耶蘇宗に帰伏して、神明仏陀の冥利遠離し、当国没落す。宮師諸社家人等難儀此の節成り。就中、大宮司は堪忍遂げ難きに因りて、離山浪人の境界と成り行き、中国萩と云う所に栖を成し、云々とあったがどうもあまり知られてなかったようである。

⑫ 賀来の騒動の後、豊後賀来氏は、どうなったかについて次に触れる。

賀来氏の当主は、すでに述べたように治綱であるが、大神姓系譜を引用する関係上、ここでは、鑑保としておく。大神姓系譜によれば、鑑保二弟あり鎮綱惟重 後統幸 と云ふ鎮綱家を嗣ぐ。又二男二女あり。長を惟綱次を景吉と云ふ。次女は豊前下毛郡同家賀来の城主賀来安藝守統直の室。

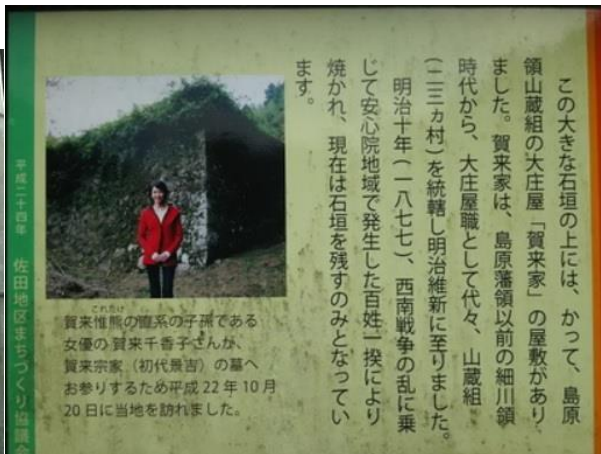
按するに我家の系図には鎮綱統幸は鑑保の弟とあれども或は鑑保の先室佐伯惟信の女の生む所にして惟綱景吉は鑑保の後室橋爪治季が女の子にはあらざるか。享禄三年賀来氏没落の時鎮綱統幸が佐伯氏に歸したるを見れば佐伯氏に深き縁故あるが如し。而て惟綱景吉等が同しく佐伯氏に走らずして橋爪と伴ひ伊豫に渡り越智氏を頼みしは豊後に依るべき近親なきが為め祖母の里方をたよりたるなるべし。又惟綱景吉が四十餘年の永き流浪の間一回も鎮綱を頼まざりしは異腹の兄弟にて親密ならず、鎮綱統幸二人家督を相續せしを不満に思ひしが為ならん。

鎮綱統幸を鑑保の弟とせんか。鑑保は死去の時六十八歳なりとすれば鎮綱如何に若くも三四十歳以上なるべし。然るに享禄三年より鎮綱大活動の天正十五六年?は五十八年なれば、享禄三年に鎮綱を三十歳とすれば天正十六年には九十歳に近き老人なり。又四十歳とすれば百歳に垂んとす餘りの老齡にて活動は覚束なし。二十歳とするも七十七八歳の老武者なり是より以上の老年にては軍事上の功勞思ひもよらず。賀来城合戦の時は先づ二十歳前後の弱輩なりしか。後年の軍功に比すれば其働き鈍きが如し。惟ふに天正の鎮綱は或は享禄の鎮綱の子なるやも計り難し何等か錯誤あるべしと思はる。

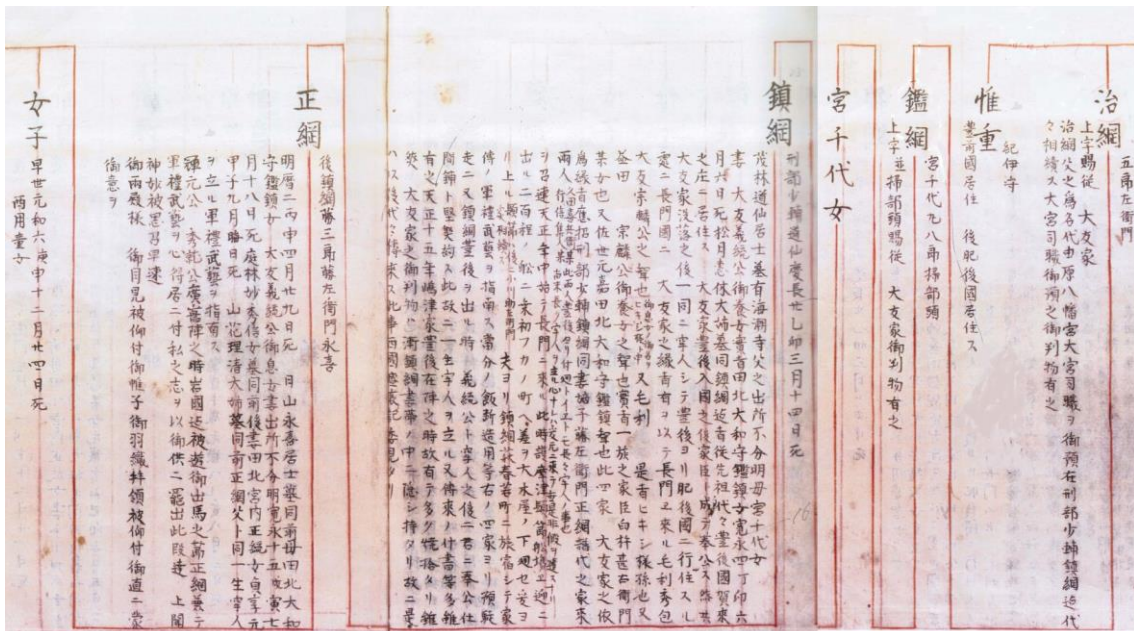
というのが惟達氏の推理である。

景吉が、賀来飛霞、惟熊、千香子さんの祖である

⑬ 賀来鎮綱が山口（長門）に移り住んだ由来は、山口賀来家の系譜の添え書きによると、大友家が没落した後、豊後から肥後に行っていたが、大友家の縁者が長門にいたので、長門に移った。その後長門では、武芸を指南していたが、大友義統との約束もあり、毛利に仕えることはなかった。伝来の文書は、島津氏が豊後に在陣した時に焼き捨てたが、大友家の判があるものは帯の中に隠し、後代に伝えた。とある、



⑬ 惟達氏が大神姓系譜でのべていた錯誤の部分が、山口賀来氏の系図(写真)により解明されたと思われる。



⑭ 景吉(かげよし?)の名前の由来を考えると、豊後賀来系の文書の中には、見つからないので、おそらくは、佐田の地頭であった佐田氏から一字を貰ったものと思われる。当時の佐田文書には、佐田氏の当主やその兄弟に、景の名を持つ、泰景、朝景、俊景がある。また、永正六年(1509)の境界論議の記事が速見郡史にあり「宇佐郡佐田荘古川村と速見郡山香郷山浦村川床との境論議あり。山香郷より郷司志手加賀守・野原対馬守、佐田荘より同地頭佐田左衛門大夫・同代官加来大蔵少輔立会いし、検議の上解決せり。という記事がある。その後また論争があったようで、加来大蔵少輔・佐田左衛門大夫両人の書状がのこっている。年号は大永四(1524)年卯月十三日となっている。賀来の騒動の6年前である。賀来善右衛門尉、加来神左衛門尉の判もあり、この地方に、賀来氏と加来氏が有力者として存在した。

⑮ 賀来の騒動の後、享祿四年(1531)には、柚原八幡宮東光房から賀来地頭賀来紀伊守等を

非難する書状が出されており、山口賀来氏の系譜に依れば、治綱の弟の賀来惟重が紀伊守であるので、惟重が一時期、賀来の地頭となつたのではないかと思われる。

天文五年(1536)に賀来社正大宮司紀伊守あてに大友義鑑からの礼状がある。このときには、大宮司も惟重が継いでいたと思われる。

次に、天文八年(1539)に賀来社大宮司平鑑綱あての「有識故実を伝授す」という文書があり、天文九年(1540)には、賀来社大宮司鑑綱あての大友義鑑からの肥後の国一部預け状が出ている。この鑑綱は、山口賀来氏系譜では治綱の子とされている。どうもこの年には、鑑綱が賀来に帰っていて大宮司になっていたのではなかろうか。

天文十年(1541)には、賀来紀伊守あての唐人成敗の感状が義鑑から発せられているが、賀来の地頭はこのときには、惟重から鑑綱に交代していたものと考えられる。

天文十九年(1550)には、大友二階崩れの騒動が発生し、義鑑が死亡し、大友義鎮がその後を継いでいる。

⑩ ① 鑑綱の後は、永禄四年(1561)に宮千代丸が継いでいる。

その証拠が次の安堵状である。

親父掃部頭一跡之事、賀来社大宮司職、同本下用並進官物以下、親治・義鑑以御判之辻、任相続之旨、領掌、不可有相違候、恐々勤言、

閏三月廿八日 義鎮 在御判

賀来社

大宮司宮千代殿 』

鎮綱への譲り状や安堵状は、見つからないが、天正十一年(1583)の大宮司宛の義統の文書

「於由原八幡宮臨時之祭礼、被執行之由候、祝著候、弥可抽精誠事肝要候、猶大津留主馬允可申候、恐々勤言、

二月廿八日 義統 (花押)

賀来社 大宮司殿 』

等数通の書状があるほか、

天正十四年(1586)に高崎城整備に関する大友義統感状

「今度至・高崎、令登城、別而辛勞、殊普請等之儀、預馳走之由、祝着深重候、弥無油断、覚悟肝要候、猶田原近江入道可申候、恐々勤言、

(天正十四年)

十一月廿一日 義統 在判

賀来社大宮司殿 』

などが発せられていて、鎮綱とは書かれていないが、系譜、大友氏の事績とあわせて、大宮司は鎮綱で間違いのないと思われる。

文禄二年 大友吉統が豊後を召上げられ、朝鮮出兵の大友軍は、黒田軍に編入されるが、慶長三年十月(1596)の義統豊後侍着到記の中に、大宮司の記録がある。

⑰ 元龜(1570)ごろ、八房丸を柚原宮宮師跡と承認する文書が大友義鎮から出されている。元和六年頃(1620)の宮師豪政の文で、賀来地頭民部少輔の次男八房丸が、宮師の養子となり、第三十一代宮師を嗣いで豪栄と称したとある。この文には宮師の由来のほか、「第三十代秀清宮師に男子なく、女子一人有り。其の節、賀来の地頭民部少輔に妻無きに因りて、娘を以ってこれに娶す。民部少輔に男子二人出来、次男を八房丸と号す。秀清遷化の時、彼八房丸に宮師跡を付属せんと希う所なり。秀清の遺誠に順って、其の祖母は大友義鎮公に注進を遂げ、大守も頗る感悦に思し食し、御奉書等下し置かれ、即ち件の祖母は八房丸を養育し、出家を遂られ、宮師毫栄と称す。」と記されている。

⑱ 今回念のため、賀来氏関連文書中に、「鑑保」「治綱」の文字が残っていないかデータを検索してみたが見つからなかった。惟達氏、秀三氏、の解説の中には当然複数回出てくるが、古文書原文に使用されている文字は、「賀来左衛門大夫」「賀来五郎左衛門尉」である。賀来と左衛門では、

宝治二年(1248)豊後国賀来庄地頭小次郎維綱與左衛門尉頼妙法師法名妙念
栄正五年(1508)賀来藤左衛門(賀来五郎左衛門尉宛 大友親治書状所有者)
が見つかった。古文書のDB化で便利となった例である。

⑲ 肥後の賀来氏については、その来歴を知る重要な文書がある。

この文書は寛永十八年(1640)頃、細川藩士の賀来佐左衛門尉が大内蔵助を通して、大友右京亮正照に提出した文書で、賀来ものがたり史料編にも収録してある。

「賀来氏来歴覚え」で、「私の。祖父大神兵部少輔。同名三七父子儀、豊後之内 天賀城ヲ持居申候、大友屋形様御居城上野原ヨリ一里半、御近所ニテ御座候、」で始まり 大友家に廿一代つとめ、大友家の時代には七人衆之内で、親子共に御名乗を一字ずつ貰ったこと、朝鮮征伐にも加わったこと、家康が会津表に出立する際にも 感状を貰ったこと、三七は名を老後は兵右衛門と言ったこと。

同名の賀来中書は、朝鮮征伐の際 三十六才で討死したこと。

同名の賀来弾正が大友政親とともに長門で切腹したこと、宇留津城等でも忠義をつくしたことなど、豊後賀来氏に関する文書に残る出来事が逐一記されている。その後は、黒田と競り合い、和談なったこと。小倉で手柄を立て細川家に仕えたと記されている。

この内容に、適合する者を豊後賀来氏の中で求めると、

天正十年(1582)に親父兵衛門鎮光の跡を賀来松寿に相続させるという義統の文書がある。また、天正十七年(1589)には、「賀来三七旧名統久、幼名松寿丸、後号大神神九郎」という内容の吉統の加冠状など数通の文書がある。

このことから、今後の検討を要するが、鑑綱の弟に兵衛門鎮光があり、統久につながり、細川藩の賀来の一部となったのではないかとも考えられる。

古文書では、治綱の次男とされる賀来神九郎の事跡は、延徳元年(1489)に、大友親勝を介錯した。享祿四年(1531)義鑑より領地を授かった。天文元年(1532) 義鑑豊前侵攻に伴い部下が傷を負い、感状を賜った。天文二年(1533)、同三年にも、大内氏との戦いで義鑑から

感状を貰っている。等が有る。

Q 積さん、賀来宗家や佐田の賀来氏は「惟」の字を諱に使用している御先祖が多いですが、分家などで「惟」の下の文字（例えば「惟光」の「光」）を代々継承している事例は見られますか？先日、書きましたように、我家の祖先の姓は「大神」で諱は「重」ですべてはじまります。「惟重」との関連性があるのでしょうか？

A 賀来氏の中で現在までの系譜が残っているのは、安心院一円の賀来氏、(佐田、大蔵、房畑)と今回の山口の賀来氏くらいですので、よくは解りませんが、惟以外の諱は無いようです。主君から一字を貰うと他の字と組み合わせる事が多く惟と組み合わせるのは、少ないようです。また、大神の姓は、豊後に来た時以前の姓ですので、偉く見せたいときなどに、他の大神から分かれた姓の方も使ってる例が多いようです。一人の人が名前を複数つかえわけているので、同定が大変です。系図は、主君に見せることも多いので、相当いい加減です。佐田の賀来氏は、佐田氏が宇都宮氏の家老相當職を務めていたこともあって、宇都宮の重臣に加来氏がいます。賀来氏と加来氏は同一人物の文書で賀を使ったり加をつかったりした例がかなりあります。豊前は加、豊後は賀が多いのですが、豊前でも、安心院の賀来氏は賀で通しています。

⑳ これまでは、古文書の記録を中心に記したが、賀来氏関係の考古学的資料について記すと、まず、大分市賀来にある賀来氏菩提寺の円成寺の境内に、賀来惟光の菩提塔がある。円成寺については、改めて記すが、永禄六年（1563）に開創された。

境内には建武元年（1334）、康永二年（1343）の五輪塔や南北朝時代の板碑が存在することから六百年前より圓成寺の前身が既に存在していたものと思われる。菩提塔は写真に示すようなものであるが、文書と照合すると、

文和三年三月（1353）九州の平定をするために西下した征西大將軍懷良親王（南軍）は菊池武光等と手を結び、着々と勢力を伸ばしたが、時の九州探題一色範氏（北軍）はこれに従わず、相対することとなった。一色党の大友一族、田原貞広、賀来惟光等は足利尊氏に弓を引く、少式頼尚軍を大宰府浦城に攻めたが、菊池氏の救援に敗れて、針摺原でいずれも戦死した。惟光は時に二十二歳のわかさであった。とある。系譜での位置は不明である。

このほかの五輪塔や板碑等の賀来氏との関係も未解明である。



賀来小二郎惟光菩提塔 文和2年（1353年） 円成寺墓地内

②①豊前の大畑城については、

中津教育委員会の加来居屋敷遺跡の文化財報告書がある。これを要約すると次のようである。

1 中世前半?に開削され、16世紀末から17世紀前半に埋没したとみられる掘りが見つかっている。

2 台地は小字「居屋敷」であり、約40戸が軒を連ねていて、「義経」を苗字とする家屋が数戸存在する。これは後述するように源義経が大畑城の築城を命じたという故事に由来するものである。集落の北側には賀来氏が建立したとされる萬福寺があり、義経自彫とされる薬師如来像も伝わっている。さらに集落には「義経堀」と称された溝が存在したことがわかっている。また、「木戸」と呼ばれた伝承もある。

3 台地上には「田中城」と呼称された重要施設が存在しており、賀来氏はここに居住した可能性がある。

4 賀来氏と大畑城については中津市史や下毛郡誌にて詳述されているので、ここではその概要を確認する。

加来と賀来氏との繋がり、元暦元(1184)年に源義経が緒方惟栄に大畑城を含む5城の築城を命じたことから始まる。大畑城に入城したのは賀来安芸守惟興という人物である。賀来氏は応永や応仁の頃(14世紀末から15世紀中頃)は大内氏に与しており、大友軍の豊前侵入を阻止している。ところが、天文20(1551)年に大内義隆が陶隆房によって滅ぼされると、中国地方は混乱状態となる。その間隙を抜いて、大友氏が豊前へ力を伸ばし始める。弘治2(1556)年には、大友義鎮が大軍を発し、豊前を侵略したことから賀来氏を含む多くの土豪はその配下になったようである。その後、天正6(1578)年に大友宗麟が日向耳川の戦いで島津氏に大敗すると、下毛郡では天正7(1579)年に野仲氏が反旗を翻し、大友方の諸城を攻略していく。しかし、賀来安芸守統直の居城である大畑城は落とすことができなかった。野仲氏は天正14(1586)年まで大畑城を48回攻めたといわれているが落城していない。しかし、天正16(1588)年、大畑城は中津に入部した黒田氏に攻められ落城し、統直は逃亡中に秣大炊助の手にかかり死亡したとされる。

5 調査地周辺では各種開発に伴って発掘調査が実施されている。

城館に係る小字は加来居屋敷遺跡の「居屋敷」、「藤本口」、「井検(いろう)」、「門田」、「法垣」と多数見られる。大畑城跡に宅地の地目が存在しないことは、平時はそこが居住の空間ではなかったことの傍証になろう。大畑城の城主賀来氏は、加来居屋敷遺跡の堀が守る台地上で平時は起居したものとすることができる。

加来居屋敷遺跡の掘りは、集落の三方を囲む東側の堀の一部であり、16世紀末から17世紀前半にかけて廃絶した。

台地上には「田中城」と呼ばれた賀来氏の居住した屋敷が存在した可能性がある。

大畑城を核にして周辺に広がる加来居屋敷遺跡や黒水遺跡などの城館関連遺構は、本城である大畑城を守る屋敷群と理解することができる。



② 最近、ブログを探っていて面白い記事にであった。細川元総理に、加来の血？ 以下、抄で示す。

現在の細川家の血脈をたどると宇土細川家に至るが、忠興側室立法院や養女お三（佐舞・宇土細川家初代行孝室・源立院）が共に加来氏である事に気づく。加来兵右衛門という人が在った。加来氏は旧姓大神氏、大友家家臣であったが大友没落後、豊前にて細川家家臣となった。四人の子が在った。

綿孝輯録・巻六二に次のような記事がある。「一書、宮松殿及び立法院殿をも宇土ニ移置と有、考ニ立法院は加来兵右衛門娘なり、豊前以来化粧田五百石三齋君より被下置、御懇之儀ハ加来が家記に詳也、三齋君御養女ニ被成置たるおさん殿も加来か娘也、後行孝主の室也、三齋君御逝去之砌も御一所八代ニ御座候而、暫く小川に御住居、無程宇土ニ被移候なるへし」

正保二年（1645）五月細川立孝が亡くなり、跡を追うように十二月三齋が亡くなった。立孝の遺児宮松は当時九歳である。宮松について「御誕生之儀御妾腹故、三齋公御機嫌之程無御心許被思召御隠便也」と、三齋の様子が井門家文書「行孝公御一代之覚」に見える。三齋の死に伴い八代分領は解体され、光尚の意により宇土支藩が創立され行孝（宮松）が初代藩主となるのである。お三様と行孝の婚儀について私は史料を持ち得ない。細川本家の意向であったのか、三齋の意向であったのか・何時の頃であったのか分からない。行孝より三つ年上の「お三様」は三齋の全ての遺品を受け継いでいる。そして行孝との婚儀をへて、それらは全て宇土細川家へもたらされた。行孝の三人の男子、三人の女子は全て「お三様」の子である。三代有孝---四代興生---五代興里---六代興文（興里弟）と続いた。興文女・埴が宗家治年に嫁ぎ、治年の跡宗家を継いだのが興文二男立礼（齊茲）である。「お三様（加来氏）」の血は現在も細川宗家並びに宇土細川家に脈々と受け継がれている。

主となるのである。お三様と行孝の婚儀について私は史料を持ち得ない。細川本家の意向であったのか、三齋の意向であったのか・何時の頃であったのか分からない。行孝より三つ年上の「お三様」は三齋の全ての遺品を受け継いでいる。そして行孝との婚儀をへて、それ

らは全て宇土細川家へもたらされた。行孝の三人の男子、三人の女子は全て「お三様」の子である。三代有孝---四代興生---五代興里---六代興文（興里弟）と続いた。興文女・埴が宗家治年に嫁ぎ、治年の跡宗家を継いだのが興文二男立礼（齊茲）である。「お三様（加来氏）」の血は現在も細川宗家並びに宇土細川家に脈々と受け継がれている。

乱世物語る 3元号並立

日本人と

元号

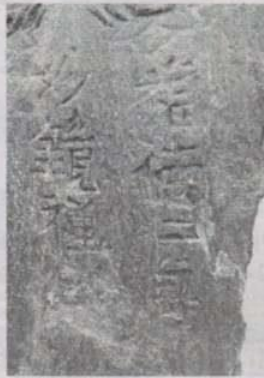
下

福岡県大牟田市の駿馬（宮原）天満宮。境内の一角にたつ高さ約2尺の石塔に「貞和六年九月」（1350年）と刻まれている。隣に並ぶ一回り小さい石塔には「貞和七年八月」とある。

ときは朝廷が分裂し、それぞれ独自の元号を用いた南北朝時代。貞和は北朝の元号で、6年2月に観応元年に改元していた。ところが当時は北朝を支える室町幕府も將軍足利尊氏とその弟直義の2派に分裂しており、直義方の直冬（尊氏庶子）が九州を席卷していた。直冬としては父が用いる観応も、南朝元号の正平も認めるわけにはいかず、その後1年以上にわたる文書で貞和を用い続けた。

大牟田市内には貞和5年や正平を刻む石塔もあるが、直冬方の貞和6、7年が目立つ。それは三つどもえの争いに否

戦国期 幸福願う「私年号」も



板碑に刻まれた私年号「福徳二年」（難波田城資料館蔵）



「貞和六年九月」と刻む駿馬天満宮の石塔。「観応」元号を用いなかったことを示す—加藤祐治撮影

応なく巻き込まれた地方の武士や寺社の政治的立場を示している。

桃崎祐輔・福岡大教授（考古学）は、「筑後（福岡県南部）は3勢力が激しく衝突した地域で、大牟田周辺には、直冬勢力に与した領主や宗教権門がいたと考えられる。おそらく直義の寺社保護政策が

直冬への期待につながっていないのではないかと指摘する。親の追善のため造立された石塔には「為天下安全国家豊饒」という銘もあり、平和を望む切なる思いが感じられる。

◇ 飢饉や戦が続いた戦国期には、朝廷が関知しない元号（私年号）が流布した。

埼玉県富士見市の難波田城資料館。死者の供養などのため石板に阿弥陀三尊の梵字を刻む板碑が展示されており、その一つに私年号「福徳二年」が刻まれている。辛亥という干支から、実際の元号は延徳3年（1491年）とみられている。福徳の板碑は埼玉県や東京都を中心に50点以上確認されており、その数は延徳の板碑を圧倒している。

こうした私年号はほかにも弥勒、命禄などが知られる。千々和到・国学院大名誉教授（日本中世史）は、私年号が登場するのは「改元待望が広くありながら、改元がなされなかった時」と指摘。「代替わりや災害による改元には、招福除災という呪術的な機能が期待されていた。それがなされない時に、民衆の願望が私年号として流布した」とみる。実際延徳4年に改元が行われると福徳は姿を消している。

縁起のいい字が並ぶ私年号に、人々は少しでも幸福になりたいという祈りを込めたに違いない。平成に代わる元号にもきっと私たちの願いを重ねることができるとは。

（西部文化部 若林圭輔、文化部 池田和正）

次に賀来氏、加来氏のルーツを整理してみたい。

1 賀来の地名の発祥

賀来と名付けられた荘園名が初めて現れるのは、治承元年八月十八日(1177)の大春日日立並下文であるが、地名賀来の初見は、長寛二年九月三日(1164)の柚原宮師職料田の譲り状である。また、柚原八幡宮を賀来の社とする文書の初見は、治承元年八月十六日(1177)の官宣旨である。これらのことから、豊後国大分郡阿南荘の一部(東部)が賀来社の名にあやかって賀来荘と名付けられたものと考えられる。

さらに、柚原八幡宮を賀来社と名付けた由来については、賀来秀三氏の論文(平成六年刊行、「賀来考」)がある。これを抄録すると次のようである。

「久寿二年(1155)まで、黒田里といわれた地名が、長寛二年(1164)には、賀来となっている。この間に地名賀来への変更の事情があったと考えられる。

大友家文書録「賀来氏来歴覚え」に柚原宮に勅使を下し、社領を成して「賀来社」と決まったという文がある。

豊後国司に就いて見るに、平治二年(1160)の冬、藤原頼輔が豊後守となって以来、その子頼経、孫宗長と三代の間、国主・国司を続けて豊後を統治しており、賀来庄の発生とも関係が有りそうに見える。

由原八幡宮を賀来社と称した文書の初見は、治承元年の官宣旨であることを先に示したが、平安末期～鎌倉期に掛けて、「賀来社」を使用した古文書を調べてみると、これらは皆、官庁側の文書であることに気付いた。肥後賀来氏による、「ヨロコビキタルノヤシロ」から「賀来社」となった、と言う伝承を思えば、地名賀来は「賀来社」と言われた後に、賀来社の御座す庄として、賀来庄が生じた可能性がある。果たして、長寛二年の宮師僧院清讓状に見える地名賀来は賀来御庄であることが判明した。

かくして、賀来庄の発生時期は、黒田里と云われていた久寿二年(1155)より。長寛二年(1164)までの十年間に有ったと想定される。

この頃の国司は藤原頼輔であり従来の国司とは異なり特異な存在であった。そこで頼輔一族に就いて調査した。

永暦元年(1160)に頼輔が豊後守と成った時、子の頼経を目代として駐在せしめ、留守所の在った大分郡に鎮座する柚原八幡宮に対して、仕事始めの祈願を行った。このときの事情は承安二年五月付け(1022)の八幡由原宮宮師僧定清并御前檢校僧尊印等解に見える。この解文は、建春門院の御願寺である最勝光院の建設費用として、阿南郷東部の黒田里周辺に在った大般若修理料田・仁王講田・最勝講田等に対して、重複賦課することは苛責に堪難きこと故、停止される様にと国衙に請願し、許可されたものである。

この重複賦課の説明には、「上記料田等に対する万難公事の停止奉免は既に多年に及びなかでも仁王講田は、刑部卿頼輔殿の御任始めに、万難公事を停止奉免せしめたもので、これにより、御寿福を祈願し、子孫御繁盛の賀を成した云々、かつ屢々後白河法皇の宝算を祈願した云々」とあり注目される文である。

以上、賀来荘と賀来氏との発生に就いて、種々の角度から検討を進めてきた。賀来荘と成った土地の領家が、どの様に移り代わり、伝承されて行ったかに就いては、まだ十分な検討は出来ていないが、いつ頃どの様にして造られ、また命名されたかは、ほぼ解明出来たものと考えている。即ち、永暦元年（1160）に藤原頼輔が豊後守となった時の御任始めに、由原八幡宮に祈願した時、また勅使が社領を寄贈した時、「賀来社」と贅えてより、由原社を国衙や都では「賀来社」と称するように成った。由原宮領地の主要部分を占める黒田里周辺の地域を、荘園化して賀来御荘と称した。

2 賀来氏の起こり

賀来荘が生まれたころ、荘園の領家である平重盛から、当時豊後で有力な豪族であり、家人であった緒方惟栄を通じて、賀来荘の下司職或は地頭の補任の打診があったと思われるが、「賀来考」によると、次のように推定している。

賀来氏の来歴に関する最古の文書は、治承三年（1179）に、緒方惟栄の従兄弟である佐伯三郎惟康が、領家（一条家）より下司職を拝領したというものであるが、その以前に、惟栄の弟惟興が、賀来荘の下司職を拝領し賀来惟興となり、その後豊前の中島城主に転出しているという伝承もある。この根拠は、現存する豊後大神各氏（緒方氏、佐伯氏等）の系譜に、賀来氏の創氏者を惟興とするものが複数見られることにある（太田氏の姓氏大辞典もこの説である）。

惟興は初めて賀来氏を称したが、治承三年に平重盛が没するや、惟栄の指揮に従って、豊前中島城主となって転出した。惟興は豊前賀来氏の祖で、元暦の頃には大畑城に移り、緒方氏が上毛郡に地名緒方を残したのと同様に、賀来氏も大畑に地名賀来（現在は加来）を残した。（義経繋ぎの城という伝承もあり、中津市教育委員会の調査報告書もある。加来利一注）

天正時代まで続いた大畑（賀来）城・宇留津城等の豊前賀来氏は秀吉の九州出兵に関連して、吉川や黒田勢に滅され、豊前・筑前の各地に散って行った。

緒方系賀来氏の跡を受けて、治承三年に賀来荘下司職と成った佐伯三郎惟康は、子息四郎惟頼を派遣し、賀来四郎惟頼と称せしめた。これが豊後賀来氏の祖である。文治三年（1187）惟頼は地頭職に補任され、その子惟綱は貞応三年（1224）に新補地頭となる。以後賀来荘地頭を代々継承した。

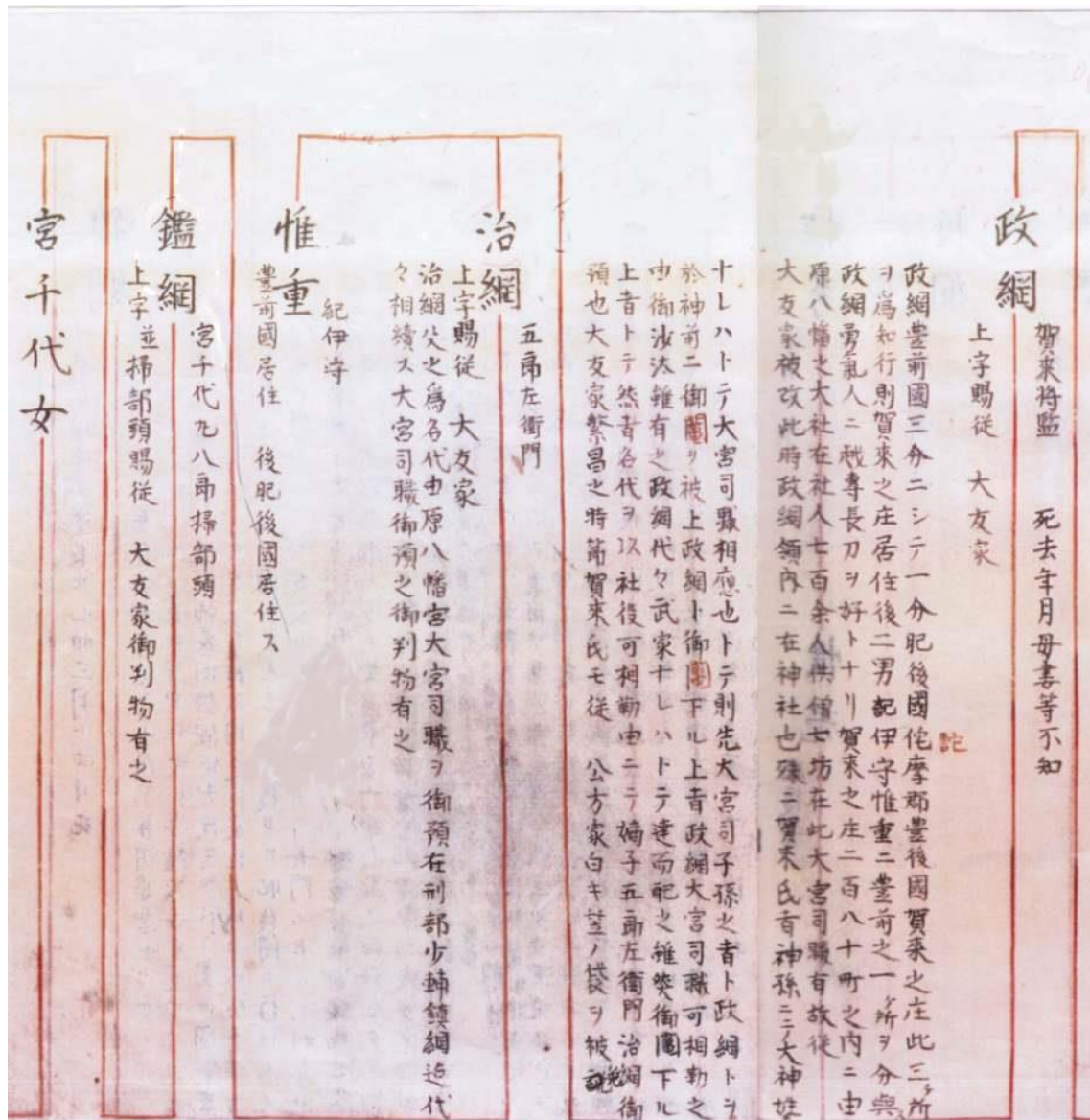
3 賀来の騒動

享禄3年（1530） 豊後賀来宗家を巻き込む騒動が発生した。

この時代、豊後大神姓の賀来本家の当主は賀来右衛門大夫治綱であった。大友氏に仕え、その名の一字をもらっている。大友の家臣に三派があった。大友氏の一族を御紋衆と称し、大友氏とともに鎌倉より来た者の子孫を下り衆と唱え、その前より土着していた諸士を国衆と呼んでいた。

国衆と下り衆とは、氏姓の上下を巡ってたびたび合戦に及んでいた。享禄3年（1530年）春に不慮の出来事が発生した。下り衆の清田越後守鑑祐が国衆の本庄但馬守、中村左衛門佐などの国衆を攻め、本庄、中村は自刃し、清田七郎左衛門越後守弟も戦没した。その後、越

後守と清田遠江守は、兵一千五百余を率いて賀来右衛門大夫を攻めた。賀来もほとんど危うかったが、国衆の橋爪左衛門大夫鑑種、大津留常陸介鑑康が賀来のため来援し、賀来は清田勢を撃破した。しかし、治綱は傷を受けて死亡し、大津留は豊前に逃れた。大友義鑑はこの騒動を聞いたが、橋爪はお咎めがなく、大津留も後年、謝罪して本領を安堵された。これが「賀来の騒動」である。氏姓の争いともいわれている。治綱には嫡子の鑑綱と弟の惟重がいてそれぞれ逃れたが、その後、大友家からゆるされた。さらに、写真の系譜にもあるように、治綱は、柚原八幡宮の大宮司を父親の政綱ともども務めていた。写真は最近見いだされた長州賀来家（豊後賀来宗家の末裔と思われる）が所有する江戸時代作成の系図である。

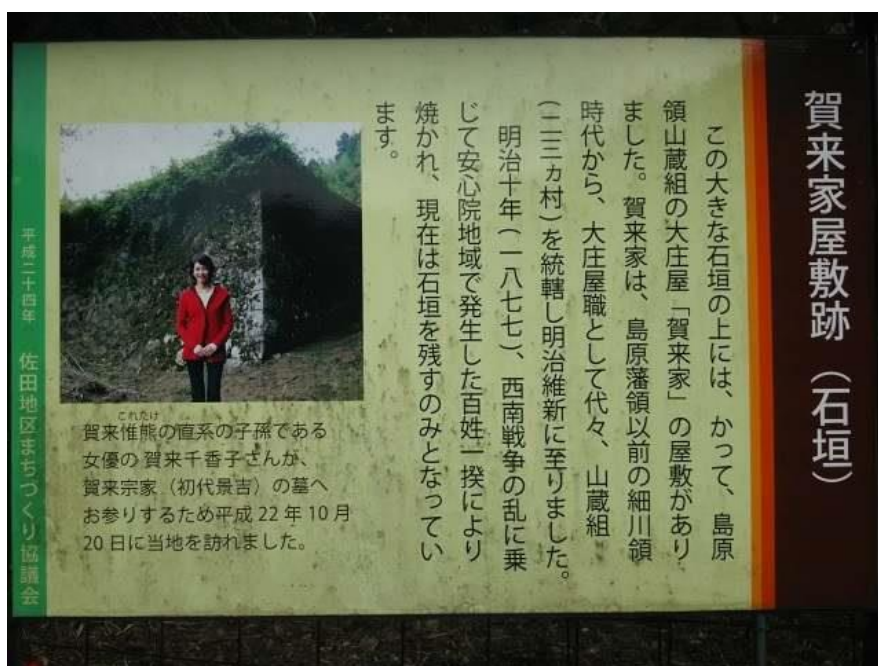


5 景吉について

景吉（かげよし？）の名前の由来を考えると、豊後賀来系の文書の中には、見つからないので、おそらくは、佐田の地頭であった佐田氏から一字を貰ったものと思われる。当時の佐田

文書には、佐田氏の当主やその兄弟に、景の名を持つ、泰景、朝景、俊景がある。また、永正六年（1509）の境界論議の記事が速見郡史にあり「宇佐郡佐田荘古川村と速見郡山香郷山浦村川床との境論議あり。山香郷より郷司志手加賀守・野原対馬守、佐田荘より同地頭佐田左衛門大夫・同代官加来大蔵少輔立会いし、検議の上解決せり。という記事がある。その後また論争があったようで、宇佐郡の役人加来大蔵少輔・佐田左衛門大夫両人の書状がのこっていて年号は大永四（1524）年卯月十三日となっている。賀来の騒動の6年前である。賀来善右衛門尉、加来神左衛門尉の判もあり、この地方に、賀来氏と加来氏が有力者として存在した。

写真は、宇佐市安心院佐田所在の景吉系の遺跡など

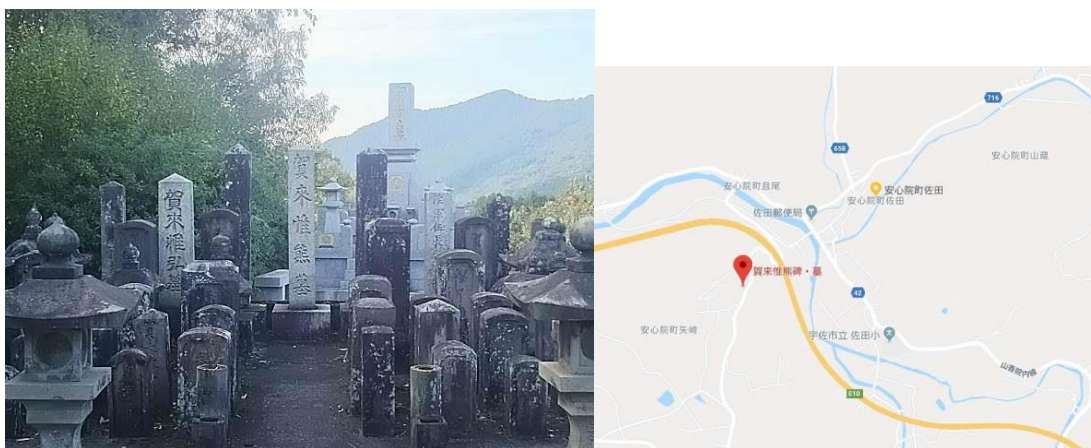


6 景吉系（佐田賀来氏の有名人）

この系統の有名人には、まず、江戸末期からの惟熊（これたけ）や飛霞（ひか、睦之）それに佐之であるが、詳しくは私のウェブ <http://kaku-net.jp/kakuh/index.html> に、大分県と宮崎県の博物館で開催された特別展の記事があるので参照していただきたい。宇佐市のウェブにある記事を次に抄録する。

◎ 賀来惟熊は、幕末の佐田賀来家の当主で、民間で初めて鉄製砲を含む大砲鑄造に成功した人物です。惟熊は、ヨーロッパの軍事科学にもとづく高い技術力と、多額の費用を必要とする大砲鑄造事業を4人の息子とともに現在の宇佐市安心院町佐田（当時の島原藩領）で成し遂げました。惟熊は、没後の1924（大正13）年、幕末の海防強化に貢献した人物の一人として贈従五位の恩典を受けています。

◎ 賀来飛霞は、幕末の1816（文化13）年に現在の豊後高田市高田（当時の島原藩領）で生まれました。飛霞は、成長すると現在の宇佐市安心院町佐田（当時の島原藩領）で医業を開き、1857（安政4）年からは島原藩医（島原藩お抱えの医者）もつとめています。彼はその生涯を本草学にささげ、優れた業績を残したことにより、幕末の三大本草学者の一人に数えられました。日本各地をめぐり歩いて自然とふれあい、多くの観察記録と精緻な写生図を残しています。



6 加来姓の有名人（故人）

◎ 賀来止男 ウィキペディアから抜粋

加来 止男（かく とめお、1893年（明治26年）-1942年（昭和17年）は、日本の海軍軍人。最終階級は海軍少将。空母「飛龍」艦長をつとめ、ミッドウェー海戦で戦死した。熊本県八代郡松高村に生まれ、熊本県立八代中学校を卒業後、1911年海軍兵学校に入学、1914年に卒業した後は艦隊勤務を経て、1941年に、飛龍の艦長を拜命。飛龍は山口多聞少将が率いる第二航空戦隊に所属し、蒼龍と行動を共にした。飛龍と加来は新設された世界初の空母機動部隊である第一航空艦隊の一翼を担い、ミッドウェー海戦前には第二航空戦隊旗艦が蒼龍から飛龍に移された。ミッドウェー海戦でも飛龍は3空母(赤城・加賀・蒼龍)が次々に被弾・炎上する中で生き残り、アメリカ軍空母ヨークタウンを戦闘不能に陥らせたが、

飛龍は、飛行甲板に4発の爆弾が直撃して大破炎上する。機関出力も低下して、遂に飛龍の最期を悟り6月6日午前0時15分、総員退艦を命じる。そして、加来は司令官の山口と共に退艦を拒否して艦と運命を共にしたのであった。享年48歳。この様子は北蓮蔵の戦争画「提督の最後」にも描かれており有名である。



◎ 賀来佐賀太郎 ウイクペディアから抜粋

大分県宇佐郡佐田村（現：宇佐市安心院町佐田）で、佐田賀来氏一族の賀来重八郎の長男として生まれ、親戚の賀来熊次郎（本名は惟達、『大神系譜』の著者）の養子となる。第五高等学校を経て、1899年7月、東京帝国大学法科大学法律学科（英法）を卒業。同年8月、農商務省に入り、鉾山局属となる。1900年11月、文官高等試験行政科試験に合格した。東京鉾山監督署で鉾山監督官として勤務。

1903年9月、台湾総督府に転じ、同年10月、民政部通信局庶務課長に就任。以後、兼通信局海事課長、兼通信局電務課長、兼通信局郵務課長、民政部土木局庶務課長、兼土木局土木課長、専売局長などを歴任。1921年7月、総務長官に就任し、1924年9月まで在任。同年11月、ジュネーブ国際阿片会議に政府代表の一人として参加した。

退官後、熱帯産業株式会社社長、南洋企業株式会社社長などを務めた。



旧台湾総督府庁舎

1903年9月、台湾総督府に転じ、同年10月、民政部通信局庶務課長に就任。以後、兼通信局海事課長、兼通信局電務課長、兼通信局郵務課長、民政部土木局庶務課長、兼土木局土木課長、専売局長などを歴任。1921年7月、総務長官に就任し、1924年9月まで在任。同年11月、ジュネーブ国際阿片会議に政府代表の一人として参加した。退官後、熱帯産業株式会社社長、南洋企業株式会社社長などを務めた。

。



惟栄に平氏を九州から追い出すよう伝える

豊後国は刑部卿三位藤原頼輔(よりすけ)の領国であった。子息頼経(よりつね)を知行の代官としておいていた。

その頼経に後白河法皇から頼輔を通じて使者が遣わされた。

「平家はすでに神々にも見放され、法皇にも見捨てられ、都を脱出し、西海の波の上を漂う落人となった。しかるに九州の者どもがこれを迎え入れていること、(し)からぬこと。隣国と一味同心して九州から追い出すように」と申し送ったので、頼経はこの次第を豊後国住人の緒方三郎惟栄に下命

した。

かの緒方三郎惟栄という者は、おそろしき者の末裔なり。と申すは、当時、豊後国の或る片山里に住む夫をもたない独り身の娘がいた。

ところがいつの頃からか、素性の知れぬ不思議な男が夜な夜な娘のもとに通いつめ、やがて、娘は身ごもってしまった。その母が不審に思い、娘に問い尋ねると、娘は、男の来るときにはわたしの目にも見えるが、帰るときは何も見えないと語った。



華御本(はなのおもと)のもとに通う大蛇の化身



姿を現した大蛇

「なれば…」という声とともに岩屋の奥から、とぐろを巻けば5、6尺もあろうかという大蛇が身をゆすりながら、這い出てきた。

これを見た娘は、肝をつぶして、魂も消えるほどに驚いた。

引き連れてきた侍たちも10人あまりも、悲鳴をあげてその場を逃げ去った。

娘が、男の狩衣の襟首に刺したと思った針は、大蛇ののど笛のところに突き刺さっていた。



悲鳴をあげてその場を逃げる郎党



華御本に男のことを問いたす母

そこで母は、娘に男が帰るとき針で「緒環」(芋環)を通して、そっと男の襟に刺しなさいと、と教えた。

娘は、その夜、母の教えどおり、男の襟に針を刺した。男が何も知らずに帰ったあとをたどると、日向国の境にそびえる姫岳(今の祖母山)という山のふもとでの大きな岩屋の中に糸が続いていた。

娘が岩屋の入り口にたたずんで耳を澄ませていると、岩屋の奥から異様な唸り声をしたので、娘は「あなた様のお姿を見たさに、ここまで尋ねてまいりました」と言うと、奥から「われこそは人間の姿をしているものにあらず。

そなたが、われの姿を見れば、肝もつぶれるばかりに驚くことは必定。そなたの腹の中の子は、男子にちがいない。武勇にすぐれ、九州・吉岐・対馬にも並ぶ者ともあるまいぞ」と答えが返ってきた。

娘はなおも呼びかけて「たとい、どのようなお姿にもせよ、日々の睦み合いが忘れられましようぞ。互いの姿を今一度見せあいましよう」と言う。



姫嶽のふもとの岩屋にたどりついた

平家物語にある豊後大神氏の大蛇伝説によく似た伝説が、豊後大神氏の祖先である大三輪氏にあります。古事記記載のもので、この大物主神がオオムナチで、大三輪氏の祖先とされているのです。以下ネットから抜粋。

倭迹々日百襲姫命（ヤマトトトヒモソヒメノミコト）は大物主神（オオモノヌシノカミ）の妻となりました。しかし、その神は常に昼は見えず、夜しか現れませんでした。倭迹々姫命（ヤマトトトヒメノミコト）は夫（セナ）に語って言いました。

「あなたさまは、常に昼は見えないので、ハッキリとその尊顔（ミカオ）を見る事ができません。お願いしますから、もう少しゆっくりしてください。明日の朝に美麗（ウルワ）しい威儀（ミスガタ）を見たいと思います」

大神は答えて言いました。

「言理（コトワリ＝言ってる事は）灼然（イヤチコ＝よく分かる）だ。私は明日の朝にあなたの櫛笥（クシゲ＝櫛を入れる箱）に入っている。頼むから私の形（＝本性）に驚くなよ」

倭迹々姫命（ヤマトトトヒメノミコト）は心の裏（ウチ）で密かに怪しんでいました。夜が明けるのを待って、櫛笥（クシゲ）を見ると、とても美麗（ウルワシ）い小蛇（コオロチ）がいました。

その長さ太さは下衣の紐のようでした。それで驚いて叫びました。それで大神は恥ずかしく重い、すぐに人の形になりました。

「お前、我慢出来ずにわたしに恥をかかせた。

わたしも山に還って、お前に恥をかかせよう」

それで大空を踏んで、御諸山（ミモロヤマ）に登りました。

倭迹々姫命（ヤマトトトヒメノミコト）は仰ぎ見て後悔して、ドスンと座りました。

急居は菟岐于（ツキウ）と読みます。

それで箸で陰（ホト＝女性器）をついて亡くなりました。

それで大市（オオチ＝大和国城上郡大市＝奈良県桜井市北部）に葬りました。世の人はその墓を箸墓（ハシノハカ）と名付けました。この墓は、昼は人が作り、夜は神が作りました。

大坂山（奈良県北葛城郡二上山の北側の山）の意思を運んで作りました。山から墓に至る人民が並んで列を作って手から手へと手渡しに運びました。



蛇と日本人とのかかわりは、縄文時代からのもので、上田正昭氏の私の日本古代史（新潮選書）によると、

中期の縄文土器や土偶のなかには蛇体装飾のものがかなりある。長野県札沢遺跡から出土した土器あるいは同県尖石遺跡出土の土器などには、土器の釣手、口縁部、杷手などに蛇体や蛇頭があらわされているが、山梨県坂井遺跡でみつかった中期の土偶には、その後頭部の髻方にとぐろをまいた蛇体を表現している。そうした例はこの他にもあって、蛇体の信仰が、縄文時代にもあったことを示唆する。

長野県井戸尻遺跡群の曾利遺跡 32 号住居跡から発見された深鉢土器の文様について、「その主要な文様の中心には、人体文が両足をぐったり開いた恍惚の状態につけられて」、「この人体文の頭部には、天に向かって目を開いた蛇体が、土器把手となつてついている」、「また人体文の開いた両足間に、緊張した蛇体が、受容の体勢充分に広がった女陰部に、抑入される図であるとみられる」とする解釈がある（宮坂光昭－縄文人の蛇体信仰）。これなどは、「蛇体を冠する特殊な女性」、「蛇を奉じて呪術を司さどる特殊な女性で」その神人交合を画いている」ものと考えられている。

古代のカミのなかには、蛇体をもって登場するものが少なくないが、それを”おろち” ”みずち” ”いかずち” あるいは”かぐつち”と呼ぶその由来をさかのぼれば、縄文時代の蛇体信仰にまでたどりつく。

とある。

写真は、神人交合文土器



昨日 Michio KAKU 氏のことを書いたが、今日の読売夕刊にインタビュー記事が出たのでご

紹介する。詳しくは読売オンラインでどうぞ。

The clipping is from the magazine 'Science & Ecology' (サイエンス&エコロジー), dated June 27th (Saturday). The main headline reads 'SF作品 独創的研究後押し' (SF Works Push Forward Original Research). Below this, a sub-headline says '描かれた未来多くが実現' (Many of the futures depicted are realized). The central focus is an interview with Michio Kaku (ミチオ・カク氏インタビュー), a physicist at Harvard University. The article discusses the relationship between science fiction (SF) and scientific research, noting that many concepts depicted in SF have become reality. It mentions Kaku's work on string theory and his influence on popular culture through his books and TV appearances. The article is accompanied by a photo of Kaku and several movie covers, including Harry Potter, Matrix, and Avatar. The text is in Japanese and includes various sub-sections and quotes.

大友由緒姓名記。

古い新聞記事から抜粋。

県立先哲史料館所蔵の「高野山本覚院文書」に、「大友由緒姓名記」と題する史料があるそうです。これは江戸時代の1789年(寛政元年)に、豊後国鶴崎の吉岡鼎寿(ていじゆ)が旧大友家臣の子孫1700人の住所と氏名を記した記録だそうです。

吉岡氏といえば、思い浮かぶのは加判衆の一人だった吉岡長増。あの吉岡宗(そうかん)です。吉岡鼎寿は吉岡長増の末裔に当たるのでしょうか。江戸時代後期になっても、まだ大友

家臣の子孫が繋がっていたとは驚くばかりです。

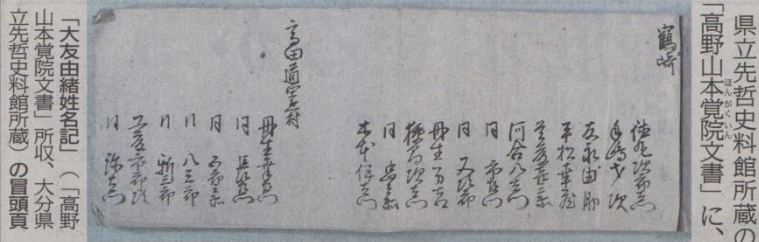
補論「大友由緒姓名記」からみる吉統除国後の豊後国と大友氏

旧家臣縦の関係性維持

「戦国大名大友氏の館と権力」

第2部 戦国大名権力論

随時掲載



「大友由緒姓名記」(「高野山本覚院文書」所収、大分県立先哲史料館所蔵)の冒頭頁

以外にも、旧大友家臣の由緒に関する数多くの史料が残されています。鼎寿はこの時期、積極的に旧大友家臣の情報収集をしていたようです。

松野氏は豊後国内の旧大友家臣との関係構築を目指し、その取りまとめを吉岡氏に期待していたのでした。これを踏まえれば「姓名記」とは、松野氏と旧大友家臣をつなぐ立場にあった鼎寿が、松野氏の指針を受けて実施した旧大友家臣の実態調査だと理解できそうです。

県立先哲史料館所蔵の「高野山本覚院文書」に、「大友由緒姓名記」(以下「姓名記」と題する史料)があります。1789(寛政元)年、豊後国鶴崎の吉岡鼎寿が旧大友家臣の子孫約1700人の居所と氏名を記した記録です。

1593(文禄2)年5月に大友吉統が改易され、大友氏の豊後国支配は幕を閉じました。「姓名記」はそれから200年近くたった江戸時代後期に至っても大友氏との関係性を受け継いできた旧家臣が、豊後国内に広範に存在していたことを具体的に示す史料です。

元々、吉岡氏は鶴崎を拠点とする大友氏の重臣でした。吉統改易後は浪人とになり、後に細川家に仕えま

松野氏は吉岡氏と同様の経緯を経て細川家に仕え、後に豊後国内の熊本藩領を統治する鶴崎番代を務めました。また旧大友家臣に宛てた書状も数多く現存しており、松野氏が豊後国との根強い関係を持続し続けたことがうかがえます。

旧大友宗家の系譜を引く松野氏と吉岡氏との間には、共に細川家臣となった以降も、以前のような主従関係が継続していたようです。そして1876(明治9)年に松野氏が吉岡氏に宛てた書状には、以前から「松野氏が二由緒触頭」とい

豊後大友氏 2代当主・大友親秀

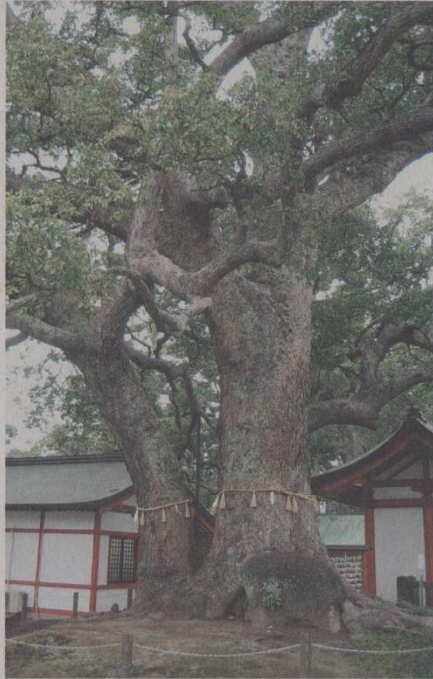
自分の記憶によれば、赤神諒著『戦神』の主人公・戸次鑑連(べつき・あきつら)は、その祖をたどれば戸次氏にいきつきます。

さらに祖をたどっていくと、豊後大神氏へいきつきます。一応、家祖は戸次重秀となっています。この戸次重秀は、大友親秀の庶子だったという説があります。

父親の大友親秀は父親と同じく、豊後へ下向していません。そんなわけで、珍しい「大友親秀」の文字を見ると反応してしまいます。

実際、今回の記事も大友親秀のことよりも、春日神社と大友氏との関係性に重きが置かれています。

大友親秀



歴代大友氏の崇敬を集めた春日神社の巨木—大分市勢家町

春日神社の社殿修復、社領を寄進

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

大友親秀は、鎌倉時代前期の武將で豊後大友氏第2代当主です。建久6（1195）年に生まれ、宝治2（1248）年に没します。父能直を継いで、鎌倉幕府の御家人として活動しました。

本来は関東武士の大友氏当主が九州の豊後に移住したのは13世紀後半、3代の頼泰からとされ、初代能直と2代親秀が西国に移り住むことはありませんでした。しかしながら、親秀の兄弟の能秀、時景、泰広らが地頭職を得て豊後国内に下向土着し、託摩氏、後国内に下向土着し、託摩氏、一万田氏、田原氏などを興し、親秀の庶子の重秀、親重、親泰らも続々と豊後に移つて、戸次氏・木付氏・田北氏などの基礎を築きます。

惣領家が関東の根拠地を維持しつつも、13世紀前半に庶子家を送り込み、豊後国内の統治基盤を固めていく姿を2代親秀が西国に移り住むことはあ

親秀を見ることのできるでしよつ。

関東武士大友親秀による豊後統治の基盤整備は、一族の送り込みのみでなく、現地の大規模宗教勢力への影響力行使にも及んでいます。

戦国時代の古図を見ると、交易都市に成長した豊後府内の外港空間として機能していた勢家・沖浜地区（大分市勢家町・住吉町）に、ひときわ大きな伽藍を持つ社寺が描かれています。春日神社と神宮寺です。

春日神社は、平安時代の貞観期（9世紀後半）に南都奈良から分祠されたとの伝承を持つ古社で、現在の境内にはクスノキなどの特別保護樹林が広がります。また、神宮寺は現存しませんが、春日神社境内の南東部に建てられていた仏教寺院で、神と仏を融合して信仰する当時の神仏習合思想による宗教施設です。

「雉城雜誌」という江戸時代の地誌には、平安時代以降の府内で力を誇つたこの二つの社寺に対する、親秀の政策の数々が記録されています。

まず春日神社に対しては、仁治3（1242）年に親秀が老朽化した社殿を修復したこと、経済的援助として社領を寄進したこと。一方、当時衰退しかけていた神宮寺には、賢如律師を招いて寺を再興したことです。

この政策以降、春日神社と神宮寺は、歴代大友氏当主の厚い崇敬を受けて繁栄していきます。例えば、21代義鎮（宗麟）の頃の天文23（1554）年には、春日神社大宮司寒田鑑秀と神宮寺長老真覚の求めにより、義鎮を大願主とした社殿の再建が行われたとの記録が残されています。

関東にルーツを持つ武將が鎌倉時代、九州の在地社会に支持基盤を確立していく過程を垣間見ることが出来ます。（名古屋学院大学国際文化学部教授）

大三輪社略縁起の大略（昭和2年版三輪叢書から、原文は写真参照）

当社大神は神代より今に御宝殿なし、みつの鳥居を持ってご神体とす、国造大物主大神と号す、末社は百八十壺神なり、ここに三輪の社に大己貴の尊の幸魂、大物主の神祭奉る、この神は神代のむかし、スサノヲノ命出雲国ヒの川上に天下り給いて、国津神脚摩乳手摩乳の娘稲田姫の命を妻とし、為夫婦大己貴神を生み給う、此神自然に御心武勇敷ましまして、広鋒を以て国を巡り、荒振神をたいらげ、御意に従う神達に御教えをして国を治め玉うゆえ、国造大物主の大神とも申奉る、また、天下の百姓のために病を治る薬の法をおしえ玉うゆえ、医術の祖神とも申すなり、鳥畜昆虫の災を払わんがために禁祈の式をさずけ給うゆえ、天下悉くに治まり、その後天神の勅宣に随い国ささげ、我は是より大和国青垣の三諸山に住居んと宣いて此山に鎮り給う、大三輪の神是なり、人王十代崇神天皇の御時に、国々疫癘年を経て

鎮らず、よって天皇自身磯城の浅茅原にて御占をし給う、然に三輪の大神天皇に託宣曰、比疫神を治るには、我兒大田々根子命を以て我荒魂を祭るべし告給う、天皇早速に百官に勅して、大田々根子の命をたずね玉う、和泉国大鳥郡茅ネの里にて尋ね求玉う、三輪の神社を北に去て、花鎮の社に此神の荒魂大国主神を祭玉う、速に疫癘治り、国家安全に治りしゆえ、天皇此神の神徳を尊敬たまいて日本大惣社と崇玉う、又同御宇に大和国高橋村に活日と申す人有、三輪の酒の掌とす、此の人一夜に酒を造りて天皇に奉るゆえ、神酒を三輪云縁なり、しかして酒解の神とも申なり、我国にて大黒神と申はこの大国玉尊を云なり、恵比寿の神と申、此神の御兒、事代主の神を申奉る、諸家の幸福神とは此二神を号す、則三輪初市に祭神なり、又八千矛の神と申すは、人皇十五代神功皇后三韓を攻玉う時、筑紫にて諸国の強兵を集め給えども御意にしたがわざるゆえ神勅にまかせ、筑前の国夜佐郡に三輪の社を建て此神を祭玉うゆえ、官軍悉くに参会、しかして韓国を平げ玉う、国家災難兵軍の時にも守護し玉う故、軍神と仰奉るも此のゆえなり、祭礼の式は人王二十三代清寧天皇の御宇に定め給う、二季の祭礼怠る事なし、略々此旨を記す、此神国の庶民信すんば有べからず、鳥畜昆虫迄此神の御頼を蒙らずと云うことなし、初心のために改而縁起の大略を記す而已、

三輪神社略縁起並獨案内

大三輪社略縁起

當社大神は神代より今に御寶殿なしみつの鳥居をもつて御神體とす、國造大物主大神と號す末社は百八拾壹神なり、爰に三輪の社に大己貴の尊の幸魂大物主の神を祭奉る、此神は神代のむかし素盞島尊出雲國簸の川上に天降り給ひて國津神脚摩乳手摩乳の娘稻田姫の命を妻とし爲夫婦大己貴神を生み給ふ、此神自然に御心武勇敷まし、て廣矛を以て國を巡り荒振神をたひらげ御意にしたがふ、神達に御教をして國を治玉ふゆへ國造大物主の大神とも申奉る、また天下の百姓のために病を治る藥の法をおしへ玉ふゆへ醫術の祖神とも申なり、鳥畜昆虫の災を拂はんがために禁祈の式をさづけ給ふゆへ天下悉くに治まり其後天神の勅宣に隨ひ國さくげ我は是より大和國青垣の三諸山に住居んと宣ひて此山に鎮り給ふ、大三輪の神是なり、人王十代崇神天皇の御時に國々疫癘年を経て鎮らす、仍而天皇自身磯城の浅茅原にて御占をし給ふ、然に三輪の大神天皇に

三輪神社略縁起並獨案内

三輪神社略縁起並獨案内

託宣曰、此疫神を治るには、我兒大田々根子命を以て我荒魂を祭るべしと告給ふ、天皇早速に百官に勅して、大田々根子の命をたずね玉ふ、和泉国大鳥郡茅淳の里にて尋ね求玉ふ、三輪の神社を北に去て、花鎮の社に此神の荒魂大国主の神を祭玉ふ、速に疫癘治り、国家安全に治りしゆへ、天皇此神の神徳を尊敬たまひて日本大惣社と崇玉ふ、又同御宇に大和國高橋村に活日と申す人有、三輪の酒の掌とす、此人一夜に酒を造りて天皇に奉るゆへ、神酒を三輪と云縁なり、仍而酒解の神とも申なり、我國にて大黒神と申は此大国玉尊を云なり、恵美須の神と申も此神の御兒、事代主の神を申奉る、諸家の幸福神とは此二神を號す、則三輪初市に祭神なり、又八千矛の神と申は、人皇十五代神功皇后三韓を攻玉う時、筑紫にて諸国の軍兵を集め給へども御意にしたがわざるゆへ、神勅に任せ、筑前國夜佐郡に三輪の社を建て、此神を祭り玉ふゆへ、官軍悉くに参会、仍而韓国を平げ玉ふ、國家災難兵軍の時にも守護し給ふ故、軍神と仰奉るも此のゆえなり、祭禮の式は、人王二十三代清寧天皇の御宇に定め給ふ、二季の祭禮怠る事なし、略々此旨を記す、此神国の庶民信すんば有べからず、鳥畜昆虫迄此神の恩頼を蒙らずと云事なし、初心のために改而縁起の大略を記す而已、